

「巻き込まれ親父の海難」

作 藤次郎政秀

●プロローグ、夏至

夏の暑さの盛り、夏至を挟んだ一週間の間、皇国では先祖を敬う祭りがおこなわれる。その期間、白山亭では、この期間は毎年“浴衣ウィーク”と言う事で女給達は二部式の着物にエプロン、女性のフロアスタッフは浴衣に割烹着と言う、白山亭の歴史をつづったアルバムからヒントを得て、T Tの発案で接客する事になっている（ちなみに、H Gは甚平）。

その最終日、皇国の先祖を敬う祭りは賑やかに終わる。Y国際港も開港記念日と重なり、Y国際港は駅前から人々がごった返し、Y国際港駅前商店街も書き入れ時となる。帝都からも人が来る目的は、昼間のY国際港の開港記念パレードに始まり、夜は大花火大会が行われる。また洋上では、皇王陛下が国内の要人や各国大使を招いての船上パーティーと観艦式が行われる。そのため、Y海軍基地には、観艦式に参加する皇国各海軍基地配備されている選ばれた艦艇や、ゲストの外国の海軍艦艇が停泊し、またY海軍基地も一般公開される。その折に、O海軍基地から、A T中佐とO J少尉が白山亭を訪れ、F県領地の事件の話などに花が咲く。二年前から、A T中佐と共に、O T殿下がお忍びで来店される様になり、流石に一階のフロアではなく、二階のパラーフロアで、接待をした。O T殿下は“白山亭コーヒーかき氷”とH Gの曾祖母の実家であるA味噌醤油店から、この時期に作られる“冷やし甘酒”がお気に入り、両方を注文した。

その後で、O T殿下達は、皇王陛下が国内の要人や各国大使を招いての船上パーティーと観艦式に行くため、Y海軍基地に戻るが、O T殿下の求めに応じて、“白山亭コーヒーかき氷”用の特製シロップと、“冷やし甘酒”をお土産にして渡した。

後日、来店したB侯爵から、同じものを所望され、伺うと、観艦式の御召艦の艦内で、余りの暑さにO T殿下が土産に持たせた“冷やし甘酒”を口にして、隣に居たB侯爵にも勧

め、それを見た皇王陛下が興味を持ち、O T殿下から献上され、気に入ったとの話を聞き、H Gが恐縮すると共に、A味噌醬油店に急ぎ連絡をして、B侯爵に「冷やし甘酒」土産に持たせた。

夜のY国際港の花火大会は、H Gは娘息子達を始め、アルバイトや社員達に白山亭の屋上を解放し、店の仕事のシフトでない人達は、屋上の特等席で、ビールなど片手に花火見物をしていた。I Iは「いっそ、夏場は屋上をビアガーデンとして開放したらどうですか?」と提案されたが、元々屋上は旧碇屋時代の物干し場であるので、給仕の事を考えると、無理と言う事になった。

●パパ、海水浴行きたい

真夏の夜、H Gは母屋の縁側で、缶ビール片手にパイプを吹かしていた。そこに、隣室の居間の襖が空いた途端、

「「。パー、海に行きたい」」

と、いきなりX姉妹が飛び込んできてH Gの背中に抱きつく、H GはX姉妹の圧力に耐えながら、

「暑苦しい!」

と言うと、

「「うみへ、海で泳ぎたい」」

と言って、一層H Gに物理的圧力をかけた。

「これ、あんた達。海水浴なら、その岸壁に行つてそこから海に飛び込みなさい!」
と言って、その後からH Yが缶ビールとつまみを乗せた盆を持って入つて来た。H Yの言葉を聞いたH Gは（…こいつ、俺について回って居るので、とうとう思考回路まで似て来たか!）と目が点になった。

「やだー、港の海水、油臭い」

と言って、H Yに向かって舌を出す。それを聞いて、H Gは（そうか…子鼠共（X姉妹）の故郷のI国は、海に接している国土が少なく、またこの子達の故郷は内陸でD国、F国、S国に近いから、海で泳いだことないのか）と考えた。

「子鼠共、まずは離れて、そこに座りなさい」

「ハイ」

と言って、H Gから離れて素直に従う。

「そもそも、なんで、海で泳ぎたいんだ？」

「泳いだことないから」

「海水って、川の水より体が浮くんですよ。だから泳いでみたい」

と口々に回答した。それを聞いて（海で泳ぐ理由は一緒だけど、珍しく別々の意見を述べたな）と気づいた。

「お前さん達、そもそも泳げるのか？」

「うん、ボクは故郷では川で泳いでいたよ」

「ワタシはプールで」

と、また別々に言った。

「そうか、泳げるのか…じゃ、なんで急に海で泳ぎたくなったんだ？誰かから話を聞いたか？」

「はい、ワタシはI Aオネエチャン」

「ボクは、Kちゃん」

…I Yの妹B K（B侯爵の娘）、現在白山亭内で女給のアルバイトをしています。作者

「I AとKお嬢様？…I Aは解るが、Kお嬢様とは？」

「Kちゃんは、先日お父さんのお供で、南のZ県領地のリゾートホテルに行って海で泳いで

来たんだって」

「そうか…なら、解るな。A X、I Aからなに聞いた？」

「ワタシは、I Aオネエチャンが昨年、パパのプライベートビーチでの話を聞きました」

「ああ…去年の話ね。あの浜辺は俺の物じゃないぞ、D A親分の土地だぞ」

「I Aオネエチャン、海でクジラと泳いだんだって、ワタシもクジラと泳ぎた〜い」とA Xが行った。

「クジラと泳げるとは限らないぞ」

「「なんで〜」」

「あの時は、たまたま居たんだ」

「「そうなの？」」

I Aのクジラの話は昨年、H G達が店の休みの日に葛葉組の親分D Aの持つ、Y 国際港とY 海軍基地の間にある岬の突端にある浜に行った時での事。その日、H G達が二年ぶりにその海岸に行ったら、小型のクジラ数頭が座礁していたので、港湾局に連絡して、近くの水族館の職員が来るまで、電話で指示された通りの対処をして、やってきた港湾局員と水族館の職員達と共に救出した話で、その後暫く沖に戻らないクジラを沖に追いやろうと、一緒に泳いだ事だった。

「やれやれ…今年もそんな時期か」

「「パパー、泳ぎた〜い」」

と騒ぐと、H Yが

「泳ぐなら、母屋の風呂で泳ぎなさい」

と言うと、

…ちなみに、母屋の浴槽は大きいですが、泳げる程、深くありません(笑)。作者

「「プール位、ワタシ達も知ってるよ、学校にあるもん！H Yママもパパを真似た悪いオト

ナにならないで」

と言われてしまい、H Yは俯いて、H Gは（俺は悪いオトナなんだ…）と思ってしまった。

…自覚なさい！作者（笑）

「…わかったよ、親父さん（葛葉組のD A親分）に借りられるかどうか、聞いてみよう…と、その前に、港湾局のJ Mさんに聞いてみないとね」

「「なんでー？」」

「あの浜辺は、Y 国際港とY 海軍基地の間にあるから、大腸菌とか悪い菌が沢山いるからね。港湾局のJ Mさんはそれを調査している人なんだよ。」

「「へえ〜」」

「それから、あの浜辺行くとロクな目に遭わないからなあ…」

「「なに？それ」」

「四年前に、当時のアルバイトと皆を連れて行った時は、人身売買で逃げて来た漂流者拾って、それが発端で銃撃されるし（「巻き込まれ親父の納涼」参照）、次の年は、その一週間前に上陸した台風で増水した川の水が運んできた動物の死骸が大量に漂着して、その日はY 市の衛生局と港湾局の職員達と片付けに追われ、気持ち悪いからって、バーベキューもしないで帰ってきたし、その次の年は、先年の事があって、皆気味悪がって行かなかったし…その数日後に行った、親父さんの所の若い衆が土左衛門発見するし…」

「「パパー、土左衛門ってなあに、漫画のキャラクター？」」

「…ちがうよ、水死体の事。本来は水に溺れた水死体の事なんだが…N 国のマフィアが、銃で撃たれて海に投げ込まれたらしい…」

「「そうなんだ」」とX 姉妹は反応し、「ヒィ！」とH Yが言った。

『『そうなんだ』って…お前達』

「だって、故郷の川辺って、そんな感じだったから…」

とB Xが言うと、H Gは（ああ、そうか。この子達の故郷は内戦が続いているから、当たり前
前の光景なのか…。この子達には、皇国に居る間に、この平和な景色と、色々な楽しい体験
を多くさせてあげたいな）とつくづく思った。

「そして、去年は浜辺にクジラが座礁してたんだ…。それでもお前さん達行きたいか？」

「ウン！クジラさん見たい」

「クジラは知らんけど、わかった！明日親父さんに話してみる」

「「やったー！。パパ大好き！」」

と言って、H Gに抱きつくX姉妹に（やれやれ…げんきんな子鼠共だ）と思った。

●私も海水浴に連れて行って！

翌日…

バーカウンター横の従業員出入り口から身なりを正してH Gが入ってくると、

「「「オーナー！」」」

とそこに居るアルバイト達に一斉に詰め寄られた。

「な、なんだ？アルバイト代の値上げの団交か？」

「「…それも、いいかも…じゃなくて！今年も海水浴行くんですよね？プライベートビ
ーチに」」

「だ、誰から聞いた？」

「「「あの子達（X姉妹）からです」」」

「…子鼠共、言いふらしたな」

と、H Gが溢している店内で、X姉妹は足取り軽くステップを踏みながら、接客をしていた。

「「「で、何時ですか？」」」

「まだ、決めとらん！」

「早く決めてください！私達も休みの都合がありますから」

と一層、HGに詰め寄った。HGは引くに引けなくなり、まずは港湾局の環境課の職員JMに電話をかけた。彼女は、休暇には白山亭でアルバイトをしている。

『はい、港湾局環境課のJMです』

「白山亭のHGです」

『はい、お世話になっております…って、私に掛けてくると言う事は、毎年恒例の奴ですよ
ね』

「話が早いね」

『もうそろそろと思っていましたので…で、何時です？次の定休日ですか？』

「その前に、あの浜辺の水質調査結果は？」

『はい、先日調査に行つて来たばかりですよ。結果は、大丈夫です』

「そうか、だったら、商店街会長（葛葉組）のDAさん次第だけど、一応、次の定休日を予定しているよ」

『そうですか、私も行きますよ。あと、海上警備庁（この世界の海上保安庁に該当）のWYも一昨日から船がY国際港基地に帰投して、上陸していますから、誘います』

「そうですか、WYさんも…いいですよ」

『では、正式に決まったら教えて下さいね。こっち（港湾局管理のゲート）の鍵用意しときますから』

「はい、では」

と言って、HGは通話を切ると、今度は浜の地主である葛葉組のDA親分に電話した。

『おう、HGなにか用か？』

「はい、子鼠共に海水浴に行きたいと直訴されて…連れて行かなければ、店や母屋荒らすぞ！ストライキすると…」

と、H Gが言うと、バーカウンター越しにX姉妹が「えげつなく、そんな事言ってないよ」と言った。

『そうかそうか…(笑)、あの娘達に直訴されたか、で、浜とコテージ使いたいと?』

「はい、子鼠達海で泳いだ事ないそうでした…」

『そうか、あの子達の国は…というより、あの娘達の故郷じゃ、海で泳いだなんてことないものなあ…』

「はい…」

『あんまり沖に出ると、潮流に流されて帰ってこれなくなるから、H G二人から目を離すなよ』

「はい」

『で、いつ使うつもりだ?』

「今度の店の定休日に」

『いいぞ、先週ウチの若い衆がいつて掃除させたから、綺麗になっていると思うぞ、炭もプロパンガスも新しくしたからな。鍵取りに来い!』

「はい、ありがとうございます」

『いつもの事だが、後始末と、ゴミは持ち帰ってくれよな』

「はい、わかりました」

『それから、港湾局とY海軍基地に連絡するのを忘れるなよ』

「はい」

と言うH Gの後ろで、アルバイト達が「「バンザイ」」と叫んでいた。

「決まった!今度の定休日。行くぞ!」

「「ハ―イ」と言う声に対して、「「えゝ残念」」と言うアルバイトが多く居た。

●今年は大丈夫か？

翌日…

H GはX姉妹を連れて、葛葉組の門を潜った。邸内の事務所に通されたH G達は、D A親分に出迎えられた。

「おう、H G。岬のコテージの鍵を借りに来たか。それから、X姉妹もよく来たな」

「ハイ。親分さんコンニチハ」

D A親分が渡す鍵を受け取りながら、H Gは

「…今年は何もない事を祈りますよ」

と言つて、頭を掻く。組長は笑いながら

「そう、毎年何かあるとは思えんが…儂は、この娘達とお前の弟子共とアルバイトの女の子達の水着姿を拝めないのは残念だな。今年もウチの連中に覗きに行きないように釘でも挿しとくよ(笑)」

「ハハ…(汗)」

「パパー、覗きが出るの？」

と、X姉妹が心配そうに言うと、D A親分は

「親戚の裸や水着を覗きに行くウチの子分共は、簀巻きにして港から海に放り込むから安心せい！」

と胸を叩いた。それを見たX姉妹は不思議そうに

「「親分さん、『簀巻き』つなあに？」」

と訊ねる。D Aは困ったという表情をしながらも、

「『簀巻き』と言うのは、『筵』…って知ってるかな？」

「「ナニそれ？」」

「藁とか編んだ敷物の事だね…それを体にグルグル巻きにして動けないようするんだ」

「それを海に投げ入れるんだ…故郷の川でよく見た光景だよ。もっとも故郷では、絨毯とか毛布だったけど…」

という、D A親分は驚いて

「荒んでいるのう…可哀想に」

と言って、ため息をついた。D A親分は冗談で言ったつもりが、X姉妹には故郷でよくある風景と言われたので、返す言葉に戸惑った。

●更に海水浴に連れて行って！

葛葉組を辞したH G達は、

「お前さん達の水着買わないとな…持っていないだろう？」

「ヤッター」

と、言つてX姉妹は喜ぶ。H Gは一人が大学のプールで授業受けているから水着位持っているのは承知していて、買ってあげることにした。

H GはX姉妹をY国際港街ショッピングモールに連れて行くと、その特設女性水着売り場で水着を選ばせた。そこに居合わせた様に、K T、N A、E Yが現れた。H Gはそれを見て（ヤベッ！）と思ったが、見つかってしまった。

「あら師匠、こんな所に…特設女性水着売り場なんて…」

とK Tが言くと、N AがX姉妹を見つけて、

「あの娘達に水着買ってあげてるんですか？」

と聞かれた。

「…そうだ」

「…で、事は師匠、今年は海水浴行くのですか？あのプライベートビーチに？」

「そうだ」

「私達もお供します！」

とたまたまや詰め寄られた。

H G達が白山亭に戻ると、I MとC Eが来店していて、

「H G社長、プライベートビーチに海水浴に行くそうですね」

と、I Mがニヤケて言った。

「…誰から聞きました？」

「I Yです」「T Yです」

とそれぞれ答えた。

「プライベートビーチと言っても、その岬の突端の狭い海岸ですよ」

とH Gが困り顔で言うと、

「それが良いですよ。近くて日帰りできるし、プライベートビーチだから、週刊誌のゴシップカメラを気にしなくて済むし…」

「はあ…(芸能人は海外のビーチにロケや写真撮影で行くだろうに…あ、海水浴する事はないのか)」

「連れて行って下さい！」

と、I MとC Eにも詰め寄られた。

「はい、わかりました…出発は明後日の朝早くです。ですので、前日の晩にウチに来ていただけですか」

「はい、わかりました。マネージャーもいいですか？」

とC Eが、ニヤニヤして言うと、H Gは

「はい、どうぞ…(人が増えるなあ)」

H GはY海軍基地に連絡した。

『Y国際港町内のD Aさんの岬のコテージですね？使用する期間を教えて貰えますか？あと、人数も』

「はい、明後日とその翌日の二日です。人数は…」

と言つて、

「およそ三十人程です」

『判りました。明後日とその翌日の二日間、人数はさ…三十人程ですね（汗）』

「はい（流石に多いよなあ…）」

『毎年の事ですが、注意して欲しいのは、コテージの基地側にある岩場のフェンスをくれぐれも超えないくださいね。四年前の様な…あれは、いいのか…事件だし』

「は、はい、わかりました（四年前の事、よく覚えていたなあ…）」

● 出発前夜、集結！

出発前日の晩の母屋…

「こんばんわー」

「はーい、え？I Iさん…と？」

とH Mが玄関に出ると、I Iが夫人と共に居た。

「私の女房です」

「こんばんは、社長の姪御さんのH Mさんよね？わたしI Iの妻I Jです。主人がお世話になってます」

とI Iの妻I JがH Mに自己紹介した。後ろから来たH GにI Iの妻は、

「あ、H G社長。今晚は、お久しぶりです」

「あ、どうもお久しぶりです」

「明日は、磯釣りを指南しますよ」

とI Jが張り切って言う隣で、I Iが

「社長、私はまだ店があるので…」

「ああ、早じまいしていいぞ」

「はい」

「こんばんわー」

今度はT Tが、長女のT Mと三女のT C二人の子供を連れてきた。

「あれ？T T、次女のT Sちゃんは？」

「今度はあの子が中学受験で…塾の夏期講習に行ってます」

「そうなんだ…こんにちは、T Cちゃん」

「こんにちは、H G社長さん。今年は泳げるよね？」

「…多分、大丈夫だと思うけど…(汗)」

「こんばんわー」

今度は、S HとS Y。S Yは子供のS Tを連れてきた。S Tはもう小学生…保育園の時代から保育園の後、今は小学校の後に母屋で預かっているので、慣れているが、同年代のT Tの三女のT C見て、

「あの子誰？」

とS Yに聞いた。

「あの子は、隣に居るT Tさんのお嬢さんよ。仲良くして貰いなさいね」

「はい」

「さてと…S Mが店の厨房で夜の仕事と明日の仕込みをしてるから、手伝うわよ。S T、

H Mさんについて行ってね」

「はい」とS Tが返事をする、S Hも「そうね」と言つて、S YとS Hが店の厨房に向かった。

「こんばんわ」

今度は、I MとC Eがそれぞれのマネージャーと共に来た。H GはI MのマネージャーU Kは知っていたが、C Eのマネージャーを今はK Yがしている事を初めて知った。

「あれ？K Yさん…」

「こんばんわH G社長」

と微笑むK Yに、H Gは驚き、

「K YさんはC Eさんのマネージャーさんですか？確か、アイドルユニット△△のマネージャーじゃありませんでしたっけ？」

「はい、あの件（「巻き込まれ親父の教育」参照）で、私は彼女達の担当を外されて、今はC Eのマネージャーをしています」

「そうですか（あのグラビアのお姿が見られる…）」

と言つて、デレるH Gを見たT TとH Yは嫉妬の炎を燃やした。また、I MとC Eはニヤニヤして、

「H G社長、鼻の下が伸びてますよ」と、からかった。

「こんばんわー」

と言つて、母屋に入つて来た人が居た。H Gはそれを見て

「あれ？M Jさん…」

「ハアイ、H G社長。ワタシもプライベートビーチに招待してよ」

「…A Mから聞いたかね？」

「いや、子鼠ちゃん達から…」

「え？」

「あ、M Jオネエチャン、いらっしやい」

とX姉妹が玄関に出てきた。

「お前達が呼んだのか？」

「うん…ダメ？」

とH Y仕込みの上目づかいで言う。

「いいけど（こいつら、いつM Jに懐いたんだ？）」

「わーい」

その後、水上署のM SとA K、港町署のK T、B S A TのN A、Y海軍基地海兵隊のE Y、港湾局のJ Mと親友の海上警備庁のW Yが来て、母屋の住人と、H Mの同僚の看護師J Rを含めて三十一名もの人が集まった。

E Yの姿を見つけたW Yは、

「あなた確か海兵隊の…」

「はい、巡視船Mの臨検隊隊長のW Yさんですよ。自分は海兵隊のE Yです」

「…ですよ。確かY海軍基地での合同訓練で一緒にした…なんでここに？」

「あ、自分、このH G社長を“師匠”と慕う弟子入り志願者なので」

『弟子入り志願者』？」

「はい、師匠の会社のエージェントの人達は、皆さん師匠のお弟子さん達です」

「…そうなの？」

「自分…いや、ここに居るBSATのNAと港町署のKTさん（KTはTYと同年代です）とは師匠に教えて貰い、『特別銃器携帯・使用許可証』を取得しました…なので『師匠』と呼んでいますが、エージェントとして弟子入りを考えています」

「そうですか（…そうよね。あのTYさん程の使い手が居る程ですものね）」

「師匠の弟子達は、皆限定解除です。自分以外はまだまだ…」

「あら、そうなのね（このエージェントの人達凄いのね）」

HYの指揮で、母屋の三階が解放され、TT達が泊まれるように支度を整えていた。

やがて、白山亭の夜のPub営業が終わり、IIとSMと海水浴の食事の仕込みをしていたSYとSH、それに店で女給をしていたIAとIYが母屋に入ると、HGは母屋の三階に全員を集めて、予定を説明した。

「出発は、明日の午前五時にこの母屋の建物の玄関外に集合。駅前のロータリーから『コンテナ埠頭行き』のバスに乗り、終点のコンテナ埠頭入り口で下車。そこから港湾局管理地のある岬の崖下まで歩きます。そこに設置されているゲートの鍵をそこに居るJMさんが持っているので、鍵を開けて、そこから三十分程歩きます。その道は未舗装道路なので、足元に気を付けて」

「『はい』」

「向こうでは、お昼のバーベキューの支度をした後で、泳ぐことができます…多分」

とHGが言うと、IMが隣に居るIYの袖を引っ張って

「なに？『…多分』って」

と言う中で、四年前から参加しているTTと息子娘共とJMが苦笑いした。

「いえ、四年前から行っているのですが、満身に泳げたのが四年前と去年だけなんです…」

「なに？それ」

「行く度に、何か出来事があって…」

とI Yが口を濁した。

「そうなんだ！」

「えー…今、一部の会話が聞こえましたが、毎度何かしらあるので、〃特別銃器携帯・使用許可証〃を持つてゐる人は、一応拳銃を持つて行つて下さい…ウチのエージェント以外に持つてゐる人いますか？」

と言うと、K TとN A、E Y、M Jは当然として、W Yの手が上がった。

「M Jさんは？」

「アハハ…使うと思つていなかったので、アパートに置いて来ました。貸して下さい」

「ちなみに、置いてきた銃の口径は？」

「四十五口径ですけど…何か？」

「ウチは三十八口径で統一しているので、ウチのを貸します」

「ありがとうございます」

とH GとM Jが会話しているのを聞いて、I Mはまた、隣に居るI Yの袖を引っ張り、

「I Y、そんなに物騒なの？」

「…うーん、四年前に、あの海岸にマフィアから逃げて来た人が居て、銃撃戦になりかけましたので…」

とI Yが言うと、

「…そうなの？」

とI Mが言った。I Yが黙つて頷くと、

「その時は、守つてね。頼むわよ！」

「ハイ、任せてください」

I YとI Mが話している横で、H Gは手を挙げたW Yを見て、

「ほう、W Yさん持っているんだ」

「はい、これに」

と言って、W Yが取り出した “特別銃器携帯・使用許可証” をH Gが見ると限定解除になっていた。

「限定解除ですか。素晴らしいですね」

「アハハ、それほどでも…仕事柄（実は、四年前の海での事がキッカケで取ったんですけどね…H Gオーナーの弟子達も同じ限定解除だとはね（苦笑）」

と言うと、H Gは、

「今、手を上げた人には、当社の拳銃を貸出しますので、後で私について来て下さい。あと、

TTとIIもよろしく」

「はい、准尉」「はい、社長」

…IIは、拳銃をガンスミスのロッカーに置いています。TTは店内の鍵の掛かる引き出しにしまっています。作者

「お昼は、バーベキューですが、夜もです」

「「え〜」」

と一部からブーイングが上がる。そこにSYが立ち上がって

「皆さんご安心を、私達白山亭シェフが腕によりをかけて美味しいバーベキューと料理を提供しますわ」

「「わ〜い」」

「夜は、浜辺で花火とか楽しんで下さい…しかし、打ち上げ花火はありません。それをやるとY海軍基地から海兵隊の皆さんが飛んできます」

とH Gが言うと、E Yが苦笑いした。

「コテージで一泊の後、朝食を食べて、後片付けをしてこちらに帰ってきます」

「「はい」」

「あとですね、向こうのコテージには、水道がありません。一応水タンクは満水にして使えるとの事ですが、湧き水と雨水を貯めたものですので、飲めません。トイレの洗浄と手洗いの程度くらいしか使えません。トイレは一応水洗ですが、浄化槽付きの簡易水洗トイレです。女性が圧倒的に多いので、流し過ぎには注意してください。ですので、泳いだ後の塩水を濡らしたタオルなどで拭う事は出来ませんが、シャワー等で洗い流すのは、ここに帰って来てからにしてください。ここには、二十四時間入れる大風呂があります。今からでも入れますよ」

「「はい」」

「最後に、注意点ですが、一つは、砂浜は狭いのと、水面下は急に深くなるから注意してください、二つ目は、コテージの基地側にある岩場のフェンスをくれぐれも超えないでくださいね。フェンスの向こう側はY海軍基地の管理地になりますので、超えるとY海軍基地から海兵隊の皆さんが武装して押し寄せてきます。…四年前に確認しました…」

と、HG苦笑いして言うと、またEYが苦笑いした。

「今晚は、ここに泊まって下さい。あらかじめ廊下側の障子以外の襖を取り払って、ご覧の通り、布団を敷いてあります。雑魚寝ですが、ご辛抱を…では、後は各自行動して下さい。明日の起床時間は午前四時です。明日の朝の朝食は既に用意してあります。ウチのシェフ達が用意してくれました。朝食は表の店内を使いますので、間違えない様に…解らない事は、ウチのエージェントも今夜は、ここで寝ますから、遠慮なく聞いて下さい。では皆さんおやすみなさい…あ、拳銃使う人は私について来て下さい」

と言って、HGは頭を下げると、部屋を出ていた。HGの後に、KT、NA、EY、MJ、WYがついて下に降りて行った。

「…なんか、合宿か修学旅行みたいな感じね」
とKTが言うと、

「母屋に泊まるのは初めてだけど、旅館の大広間みたいなつくりなのね」

とN Aも言った。

「この各十畳間を襖で仕切って、そこに二人で住んでいるのよ」

と、以前母屋に実習生として住んでいた経験があるE Yが言うと、

「狭！十畳間に二人！？それに襖で仕切ってるだけなんて、プライベートまるつきし無いじゃない！」

とK Tが驚くと、E Yは平然と

「そうね…でも、基地の兵舎は十人部屋だし…」

「私も官舎の部屋は四人部屋ね…畳にしたら、十二畳位かな？」

とN Aも言った。それを聞いて、港町警察署の近所の実家から通勤しているK Tは

「私…師匠の弟子入り諦めようかしら…」

とボソリと言った。

「あなたたち、歯を磨きましようね…こつちにいらつしやい」

「はい、お母さん」

と言って、T Tは子供達を洗面所に連れて行く。

「I Yさん、お風呂入れるの？」

とK Yが訊ねると、I Yは

「はい、案内しますよ」

「あ、あたしも」

「わたしも…」

と、仕事上がりのI YとI Aの案内で、仕事帰りのM SやA KとJ R、S Yと子供、S H、

S M、I MとU K、C EとK Yがぞろぞろと一階に降りて風呂場に向かう。

「こんなに人が入れるの？」

I Yに聞くI Mに

「大丈夫ですよ」

とI Yが笑って答えた。

風呂場に入って、

「うわー、広いわね」

「ちょっとした温泉旅館の風呂場ね…」

と言って、驚くI MとU KとC EとK Y、それ以外は、利用したことがあるので、勝手が分かっている。

「へえー、I Y達は毎日使ってるんだ」

「はい」

「なんか、テレビで見た人達とお風呂入るなんて緊張しちゃうわ」

とS Hが言う

「ハハハ、裸になれば皆同じと言いますから…明日もよろしくお願いします」
とI Mが言った。

男屋ガンスミス工場…

H Gは自分のコレクションのガンラックを開けて、

「この中から、選んでください…古い銃が多いのは、私の趣味なんです」
と苦笑いして言うと、W Yが

「凄いコレクションですね」

と言って、感嘆した。

「わたしこれがいい」「私これ」「わたしはこれ」「ワタシはこれかな」「では私はこれで」

とそれぞれ拳銃を選ぶ。H Gは弾薬の金庫から拳銃弾の入った箱を取り出すと、

「皆さん、この弾丸を使って下さい」

「H Gオーナー、これは？」

と、W Yが箱の弾丸を手にして訊ねた。

「これは、対テロ用の強化ゴム弾です」

とH Gが言うと、W Yは

「ここの皆さん、これを？」

「はい」

とH Gが答えた。

● いざ出発！…でも、もう一波乱…

翌朝、早朝…

母屋玄関前に集合した、海水浴一行。H Gは留守番のS Kに

「じゃ、行つて来るよ」

「気をつけてな、H G。俺も未舗装の道が無ければついて行くんだが…」

「悪いね」

「いいつてことよ。帰ってきたら風呂に入れるようにしておくよ」

「すまん」

「あ、S Kさん。留守中にわたしの同僚達（看護師）が泊まりに来るので、母屋の鍵は開けていて下さいね。誰も居ないからって、騒がない様に釘を指してはいますけど」

とH Mが言うと、M Sが

「あ、わたしの同僚達もです」

と言って頭を下げると、A KとK TとN Aもそれに倣った。

「わかったよ、任せな」

「じゃ、出発」

「「はい」」

と言って、通りに面した木戸を潜ると、そこにM ZとT Kが居た。

「…なんで居る？こんな朝早くに」

「H G社長、海水浴に行くそうですね？プライベートビーチだそうじゃないですか」

「そうだが」

「私共も、連れて行ってください」

と、までもや詰め寄られた。

「二人供、水着持っていますかね？」

「「はい」」

と言った、M Z達の足元を見て、

「…M Zさん、ヒールを履き替えて、不整地を歩くから…T Kさんのローファーはギリセーフか…」

「はあい」

と渋々返事をしたM ZにM Pが

「これ使え」

と言って、M Zに安全ブーツを差し出す。それを見て

「M P！あなた私に何の恨みがありますの？安全ブーツなんて…」
と言うと、

「M Z、お前。周りから色々恨まれてるネ。それ履かないなら、とつとと帰るネ」

と言った。それを聞いたH G（ナイスフォロー）と思った。

「わ、わかりましたわよ」

と言つて、その場で安全ブーツに履き替えるM Z、その後ろに居るT Kを見てT Tが

「あゝら、何処から情報漏洩したのかしら」（あなた、水着で准尉を悩殺する気？そのお歳で…私もだけど…ただでさえ、今日はK Yさんと言う、強敵で准尉憧れの人がいるのにいゝ）」

と言うと、

「あゝら、それは秘密ですよ（Kお嬢様からですわ、今日こそ、年増の魅力でH G社長を悩殺しますわよ）」

とT Kも負けじと言い返す。

「チヨ、T T…今日は子供の目があるから、やめなさいよ」

とH YがT Tの腕を引っ張りながら言う、T Tは我に返つて

「ハッ、そうね」

「あら、T Tさんお子様が？」

「はい、長女と三女です」

「あら、可愛い。お名前は？」

「T Mです」「T Cです」

「私はT Kと言います。あなたのお母さんの…お知り合いかしらね」

と言ったT Kに、T KとT Tの事を知っている人達は（ライバルとか敵とか言わずに我慢したか…）と思った。

そこに、

「おじさん」

「おっ！Sちゃん」

「アタシも連れてって」

と言うと、H Gは半分諦め気味に

「いいぞ（I Aめ！）」

と、I Aを見て言った。

●今度こそ、出発！

Y 国際港駅前ロータリーで、コンテナ埠頭行きのバスに乗り込む一行。

「J M、私四年ぶりだけど外国の人が増えているね」

とW Yが言うと、J Mはバス内を見回して、

「…ウフフ、そうね。最初M Pさんが参加した時はびっくりしたけど、慣れちゃった」

「…そうなんだ」

終点のコンテナ埠頭入り口で下車。そこから港湾局管理地のある岬の崖下まで歩く。そこに設置されているゲートを港湾局から借りて来た鍵を使ってJ Mが開ける。J Mの道案内で岬の崖下の未舗装の道を歩いて行く。

T TとS Yの子供達を気遣いながら歩いて行くが、四年前と違い、T CはS Tと一緒にな
って歩いて行った。

「ねえ、I Y」

「なんですか？」

「あんたが担いでる、その長いケース。気になるんだけど…前を歩いているT Yさんと、I

I さんも担いでいるけど…釣り竿か何か？」

とIMが訊ねると、IYは担いでいるケースを見て、

「…ああ、これですね。これには、准尉の釣り竿が入ってますよ。IIさんのケースにも釣り竿が入ってますね」

「そうか、釣り竿か。IIさんとHG社長、釣りをするんだ」

「それだけじゃないですよ、私とTY先輩の担いでるケースには、猟銃とスナイパーライフルと、ショットガンとグレネードランチャーが入ってます」

と言つて、IYは妖しい笑みを浮かべた。

「チョ…IYあんた悪い顔になってるけど…そんなモノ持ってきてどうするのさ」

「…いえ、過去の教訓から持つて行くように准尉に言われていますので…」

「ナニかあるの？」

「はい…」

と言つて、IYはまたもや妖しい笑みを浮かべた。

IYは、以前の話をしようとしたが、流石に鼠などの動物の死骸や土左衛門の話を聞いたら、IM達が気味悪がると思い、

「四年前に、人身売買から投げて来た人を救助して、そのお陰で追いかけて来たマフィアとあわや銃撃戦になりかけて、翌年は大量の魚（方便）が今歩いている所から海岸まで漂着し、それを狙った鳥達を追ひ払うのが大変でして…去年はクジラが海岸に座礁していたので、今度はクジラじゃなくて危険な海獣が居る可能性があるのです、念のためですよ」

「…“怪獣”？そんなモノ居るの？あんた達、怪獣退治もするの？」

「IM、多分“かいじゅう”違いだと思いますけど…海の生き物の“海獣”ですよ…トドとかアザラシの…」

「そっちな。居るの？」

「本来、居ないと言われていますが、まれにY国際港に迷い込んでくるのが居ますよ。イル

カやクジラもそうですが、シャチはY国際港沖にも居ますから。それに鮫も…」

「…そうなんだ…(汗)」

「IIさんの釣り竿は、IIさん夫婦が釣り好きですので、准尉がIIさんから磯釣りを教わるために持ってきました。准尉も釣りをしますが、専ら店の横の運河や堤防で軍曹さんとするくらいですので…もしかすると、バーベキューの食材になるかもしれませんね」

「へえ」

●あんななんてキライ(機雷) よ！

やがて右側の崖が途切れると、視界が広がり、コテージと小さな砂浜が視界に入る。

「ついたぞ」

とHGが言うや否や、X姉妹とTC、STが砂浜に駆け出した。

「子鼠共、小学生並みだな」

と言つて笑うと、

「「パパー、来て——」」

とX姉妹が呼ぶ声がした。

「なんだ？」

とHGがX姉妹の所に行くと、

「「パパ、これなあに？クジラさんじゃないよね」」

と指さす方向を観ると、海岸に打ち上げられた丸いゴツゴツした突起のある物体…HGはみた事のある様な気がして、

「子鼠共…そこに居るTCとSTを連れて後ろのコテージに行つて、代わりに、EYとJMさんとWYさんと呼んできて…早くね」

「「はい」」

と言って、X姉妹は「あっちへ行こう」とTCとSTを連れてコテージに向かった。それに入れ替わる様にEYとJMとWYが来た。

「師匠、何ですか…って、これって！」

「HGオーナー、これって…」

「…アハハ、随分凄いい漂着物ですね」

「…だよなあ、三人供見た事あるよなあ…」

「…はい、間違いなく機雷ですね」

「ハイ！、三人とも、所属先に連絡！」

「「ハイ！」」

各自それぞれ自分の所属する組織に電話した。

「おい、HY！」

「はい」

と言って、HYがHGの所にやってくると、

「今年は大当たり年だ…（でも、これって訓練機雷クサイな。ま、専門家に任せるか）」

と言って、漂着した機雷をHYに見せる。

「うわ！マジですか？今年は大物ですね」

「そくじゃない、暫くコテージから誰も海岸に来させるな。それからMSを呼べ」

「はい、准尉！」

と言って、HYはコテージに駆けて行った。HYと入れ替わりにMSとAKまで来ると、H

Gは

「大変危険な漂流物だ…人を退避させるから、警備艇を呼んで欲しい」

「「はい」」

と言って、MSがスマートフォンを出して、水上署に連絡した。

● E M大尉登場

やがて、Y海軍基地から高速艇で、爆発物処理班とE M大尉がやってきた。沖から海岸の機雷を確認して、高速艇はE Yの誘導で海岸の栈橋の方に接岸して人を降ろした。

「E Y伍長！」

「ハイ」

「あなた、とんでもない物見つけたのね」

「いえ、見つけたのはH G社長でして…」

「え？H G社長いらっしゃるの？」

「はい、こちらに…」

と言って、E YはE M大尉を連れて、機雷の前で腕組みしているH Gの所に連れて行った。

H GはE M大尉の姿を見つけると、

「あ、E M大尉」

「あら、H G社長こんにちは。とんでもない物を見つけたね…なんでこんな所に？」

「ここは、私の親戚が所有している土地です。息子娘共と店の従業員やアルバイト達、その他で海水浴に来たのですが、今年はまたこんなものが…」

とH Gが頭を掻きながら言うと、E M大尉は

『『また』と言う事は、H G社長がここに来ると何か事件が起こる訳ですか(笑)』

「あのお私を有名な探偵と同じにしないでください」

「そうですねえ、いえね、E Y伍長が『岬の突端に機雷が漂着しています！』なんて言うものだから…そもそも、この娘、休暇中になんでこんな所に居るのか不思議に思いましたが、これが、『岬の下に死体が…』なんて(笑)」

「死体なら、そちらの管轄外ですよね」

「そうでしたね…アハハ」

H GとE M大尉が冗談を言い合っている間に、爆弾処理班が機雷の状態を確認していた。そこに、水上署の警備艇が来た。M SとA Kの誘導で、海軍の高速艇の横に接岸した。警備艇から真っ先に降りて来たのは捜査官のK J…彼は、毎年海水浴の日は勤務日に当たる為に参加できずにいたが、今年こそ、I Yの水着姿見たさに水上署の栈橋から警備艇に乗り込み、なんとか岬の突端浜辺に回送させるべく工作していたが、M Sに呼び出され、それを幸いとすっ飛んできた。

K Jの姿を認めたH Gは

「やあ、K J君。早く来たね。もしかして、I Yの着替え見たさに沖で待機していたとか…残念ながら、I Yはまだ水着になっておらんよ」

と言うと、半分凶星を刺されたK Jは

「そ、そんなことはありません。警戒任務でたまたま沖に居ただけです(汗)」

「たまたまかね？」

「たまたまです」

と、赤くなつて反論するK Jを面白がるH GとE M大尉。

「あら、赤くなっちゃつてく、若いわね」

と、E M大尉にまで、からかわれる。

「で、H G社長。同僚のM Sから連絡がありましたが、浜辺に…」

と言って、K JはH Gが指さす方を見ると、

「…これ何ですか！」

と言った。

「見て分らんか？お前さんがI Yから思われている言葉だ」

と、H Gが薄笑いして言う、E M大尉が嘖き出した。

「…え？もしかして、キライ…きらい…機雷ですかあ」

と叫ぶと、コテージに居るI Yが反応して、K Jを見る。E M大尉は腹を抱えて爆笑した。

「ほおんつとうに若いわね」

今度は、港湾局の船が来るも、そこにY海軍基地の爆発物処理班が居るので、ただ見てい
るだけ…沖には小型巡視艇が危険を知らせる旗を上げ、碇を降ろして停泊していた。

「やれやれ…今回は大騒動だな」

「そうですね、准尉」

と言って、H Gの横でH Yが呆れていた。

●年代別リアクション

その頃、コテージの中では、年代別に反応がまちまちになっていた。

I Iを筆頭に、T K、K Y、I J、T T達の徴兵経験者

T Tは子供達にお茶を淹れて飲ませていた。そして、I I夫婦にお茶の入った紙コップを
渡すと、T KとK Yにお茶の入った紙コップを持って、T K達の居る所に来た。

コテージの窓から身を乗り出してT Kが外のH G達を覗いている窓の外にK Yが腕組み
して居た。

T Kは、T Tからお茶の入った紙コップを受け取り、窓辺から浜辺でK J相手にいじるよ
うなコントをしているH Gの相手のE M大尉を見て、

「あの方は誰ですか？」

と言うと、T Tは

「あの方は、Y海軍基地所属の海兵隊隊長のE M大尉さんと言って、今日一緒に来ているE
Yさんの上官です」

「…そうなの。随分親しそうね（私もあの中に混ざってHG社長とコントしたい）」

「EM大尉は、碇屋の子達と大尉の部下達とでY海軍基地の訓練施設で対抗戦をする仲ですし、部下のEYさんはウチで一時期実習生として預かりましたから」

「そうですの」

とTKは不満げに言うのと、続けて

「それにしても、あんな変な物の前で、コントしているなんて…HG社長達大丈夫かしら？」

「…あれは、多分機雷ですね…付着物が多くて良く分かりませんが…大きさと形からして、多分そうでしょう」

と、KYが言うと、TKは仰天して、

「き、き、機雷ですか？」

「TKさん、ここでは騒がないで！子供も居るのだから…不安を煽るような事言わないでください」

とTTに制された。KYは、

「私の記憶に違いがなければ、あれは機雷除去作業訓練用の物で、爆発しないと思います」

「何故知っているのですか？」

「私は徴兵時代にY海軍基地で軍の広報部にいました。それで、基地の色々な部隊の訓練の取材をしてきました。その中に機雷掃海の訓練があって…機雷の上部に微かに黄色い塗装が見えるので、多分そうかと…」

「私は、徴兵時代は近衛師団の陸軍でしたので、見た事ありませんわ」

「私もS県領地の陸軍でしたので、えっ、TKさん近衛師団に居たの？」

「…それに、あそこに居るEM大尉は、徴兵時代に同じ兵舎でしたから」

「「え〜！意外な繋がり」」

II夫婦は、TT達のやり取りを聞いていて、

「ねえあんた…わたしもあれって、訓練機雷だと思うわよ。社長さんは知っているのではないかな？」

「「なんで判るのですか？」」

とTKとTTが振り返る。

「あたし、徴兵時代は、C県領地のK海軍基地で掃海艇に乗り組んでいましたので…あれはY海軍基地の物かな？」

とIJが言うと、

「まあ、社長がああして居るのは、それを知った上で、余裕があるからですよ」

と言つてIIは椅子に腰かけて、TTの淹れたお茶を飲んでいた。

HYを筆頭に、SY、SH、SM達、徴兵制廃止直後付近

SY達シェフ三人は、持って来た食材と時計を見ながら、

「このままでは、お昼も食わずに帰る事になりそうね」

「そうね…どうしよう、折角用意したのに…」

「と、いうより、後からこの海岸に来た人達の方どうする？」

「そっか、足りないかも…」

と話し合っていた。

HYは、HGに近づきたいが、機雷が怖くて、浜辺とコテージの間を行ったり来たりしていた。

WY、TYを筆頭に、JM、KT、AM、MJ、NA達、徴兵制度廃止後から十年付近

TYは、KTと二人で不安げに窓から外の様子を伺っていた。

同じく、コテージから、砂浜でH G達のやり取りを見ていたA MとM Jは

「あの三人、コントやってる…」「そうね」

N Aは、双眼鏡を覗きながら、K Tに

「ここから、狙撃して爆破出来ないかなあ…」

「あ、確かI Yがライフルとショットガン持って来たわね…」

「それ借りる？」

「チョ、機雷って戦艦撃沈する程だから、ここからじゃヤバくない？」

とT Yが会話に入ると、N Aは、

「…そっか」

と言って、頭を搔いた。

W TはJ Mと港湾局の船から、沖に居る小型巡視艇と連絡を取り合っていた。

C Eを筆頭に、H M、J R、M S、A K、U K、I M、I Y、I A、R S、M P、M Z達、

徴兵制度廃止から二十年付近

H MとJ R、U Kは不安げにコテージの中で椅子に座っていた。

I MとC EはI Yの傍に寄り添うように座って居た。

「大丈夫ですよ、危ない時は准尉が退避する様に言いますから…あそこでああしてE M大尉達と笑っていると言う事は、准尉は大した問題ではないと考えていると思います」

と言って、二人を励ましていた。

I AとR Sは二人で、去年のクジラについておしゃべりをしていた。

M SとA Kは浜辺でK JとコントをしているH GとE M大尉を呆れて見ていた。

X姉妹は、コテージのテラスに腰掛けて、M Pと一緒に事の始終を見ていた。M ZはM P

の後ろに隠れて震えていた。

●結果発表！

H GはH Yに

「お迎えが来てるから、帰ろうか」

「…そうなりますか？今年は」

と言つて、諦めかけた時。

「大尉！」

と、爆発物処理班がE M大尉を呼んだ。

「いま行く」

E M大尉が爆発物処理班の居る場所に行くが、その時に

「H G社長。あのコテージまで退避してください」

「分った。H Y、K J君退避するぞ」

「はい」

H G達がコテージに戻ると、

「准尉、あれ何ですか？」「なにが起こっているんですか？」

とく口々に質問をうける。H Gは

「皆さん、静粛に。あそこに漂着しているは機雷です」

「機雷い？」

「はい、I YがK J君に対して抱いている気持ちの事ではありません(笑)」

と言うと、K JとI Yは顔を赤くして俯いてしまった。それをからかうI MとM S達：

「ですので海軍基地から爆発物処理班が来て、現在調査中です。いま調査結果が出たみたいですが、多分、この状況だと今回は海水浴が出来ないと思います」

「「えー、そんなあ」」

「ですので、水上署の警備艇と港湾局の船が来ているので、それに分乗して港に戻る事に…」とHGが話している最中に

「HG社長！」

とEM大尉の呼ぶ声がした。

「あ、話の途中ですが、呼ばれたので…」

と言つて、HGはコテージから出て行った。

「なにか分かりましたか？」

と、EM大尉に訊ねると、EM大尉は

「爆発物処理班の話では、これは機雷処理の訓練用の機雷で、もの凄く古いモノだそうです

…多分、先の大戦中の代物かと…」

「と、言う事は？」

「触れても起爆しません。これから基地から台船持ってきて回収しますよ。起爆しないとはいえ、風や波によつて転がると危険ですから、あと小一時間は泳げませんが、回収すれば泳げますよ」

「…そうですか」

「ですので、機雷に近寄らない範囲で甲羅干しとかバーベキューをしても問題ないですよ。ビーチでの球技はダメですけど」

とEM大尉がウインクをして言った。HGは（やはりな(笑)）と思つて、

「皆に知らせてきます」

と言つて、コテージに戻った。

コテージに戻ると、H Gは

「みなさん、新しいお知らせです。Y海軍基地の爆発物処理班の話ですと、あれは、機雷処理訓練用の機雷であると判明しました。爆発の危険ないとの事です。これよりY海軍基地から台船を持ってきて撤去するそうです。それまでは海で泳げませんが、日光浴やバーベキューは可能だそうです」

と言うと、

「「ヤッター」」

皆安堵して喜んだ。

「あ、でも転がってぶつかる怪我しますので、処理班の人達の指示された範囲から近寄らない様に」

「「ハイ」」

これを機に、港湾局と水上署の人達は引き上げることになった。

「K J君、I Yの水着姿見れなくて残念だな」

と、H Gがニヤけて言うのと、K Jが残念そうに俯いて引き上げて行つた。

沖の小型巡視艇はそのまま、停泊して、爆発物処理班はE M大尉を残して引き上げて行つた。

「あれ？E M大尉は引き上げないのですか？」

とH Gが訊ねると、

「はい、私は現場指揮官として、入れ替わりに来る作業員に対する指示のために残りました」
そこに、K Yが近付いて来て、

「あ、E Mさん久しぶり…」

「えっ？あ、K Y先輩、どうしてここに？」

「私は、H G社長にお願いして連れてきて貰ったのよ」

「はい、K Yさんの所属芸能事務所は、ウチのお得意様ですから」

とH Gが言うと、E M大尉は、

「あら、そうなんですか？」

と驚いた。H Gは二人に対して、

「お二人はどういうご関係で？」

「はい、私が徴兵時代にY海軍基地に配属されて、当時E Mさんと同じ兵舎でよく二人でお喋りをしていました。E Mさんはまだ軍に？」

「はい、今はY海軍基地所属の海兵隊の隊長をしています」

「じゃ、E Yさんは？」

「はい、私の部下になります」

とE M大尉が言うと、I MとC Eが

「K Yせんばーい」

「あ、I M。ここよ」

「あれ？K Y先輩、あの人って、確か人気歌手の…」

「そうよ、私の事務所の後輩のI M」

「じゃ、K Y先輩はI Mさんのマネージャーが何か？」

「いいえ、私は彼女の隣に居るC Eのマネージャーを今してるわ」

「そうですか、あ、アクション女優の…ドラマ見てますよ」

「ありがとうございます」

「H G社長、コテージに居るシェフの人がバーベキューの準備をしてくいていいかと言ってますよ」

「あ、そうですか。ありがとうございます」

と言って、H Gはコテージに行った。

「S Yさん、バーベキューの準備をしてください」

「あ、はい…」

「どうしました？」

「いえ、船で小陸してきた人達の食事どうしようかと…でも、皆さん帰っていききましたね」

「ええ、ただ一人増えたので、よろしくお願いします」

「「はい」」

機雷の回収班が来る間に、何人かは水着に着替え、S Y達シェフはバーベキューの準備を始め、大人達はそれを手伝い、X姉妹以下の子供達は、波打ち際で遊び始めた。

H Gは一人コテージの安楽椅子に座ると、パイプを取り出し、

「…やれやれ、やっとここに座って一服出来る」

と言って、パイプにタバコを詰めて火をつけた。

そこにK Yが来て

「あら、H G社長は海に入らないのですか？」

「はい、私はもう歳ですし、あいつらの監視をしているのが性に合っていますよ」

と言って、X姉妹を指差して言って、改めてパーカーを羽織ったK Yの水着姿を見て、

「昔のグラビア時代を彷彿させますな」

と方眉を挙げて言った。

「…あら…そんな…こんなオバサンの水着姿を…恥ずかしいです…お目汚しを…」

となって、顔を赤らめて、恥ずかしがった。

それを見ていたT TとT K。H Gを水着姿で誘惑しようとして争っていたが、先を越されてしまい、（しまった！完全に出し抜かれた…ダークホースをすっかり忘れていた…）と悔

しがる。何とか、H Gに自分の水着姿を褒めて貰おうとしようとするが、T Tは自分の子供達とS Yの子供の面倒を見るのに手一杯なので、何もできず…T Kはその隙について、H Gに近づこうとすると、I YとH Yに行く手を阻まれた。H YもH Gに水着姿で迫りたいが、K Yは碇屋のお得様の芸能事務の人なのと、H Gがファンであるので、ここは大人の対応で、I Yを支援した。それを見たT Tは（ナイス！H YとI Y）と思って、喜んだ。

●海難事故発生

そんな折、浜辺で砂遊びをしていたX姉妹は、沖に泳ぐ小型クジラの群れを見つけ、

「あ、クジラさんだ〜」

「こら！子鼠共、沖に行くんじゃない！潮流が速いから流されてしまうぞ！」

「大丈夫だよ」

とH Gの警告を無視して、X姉妹は海に入ると、沖に居るクジラの群れに向かって泳ぎ出した

「待てと言うのに！」

とH Gが言っている間にX姉妹の姿が波間に消えた。それを見たH Gは咄嗟に、

「A M！」

「はい、准尉！」

「お前、Bを俺はAを…」

「ハイ！」

「M P！」

「ハイネ！」

「コテージにある浮き輪をありったけ、海に…遠くに投げろ！」

「ヤー（了解）！」

「WYさんと、EY！」

「「ハイッ！」」

「バックアップをしてくれ！」

「「ハイッ！！」」

「TY、IY」

「「ハイ」」

「グレネードランチャーに、赤玉装填して待機！俺達が顔出したらそこに着弾させろ！」

「「ハイ！」」

と指示をして、HGとAMは海岸から海に飛び込む。

「…凄い！素早く的確な判断と指示…」

と言って、EM大尉は目を丸くしていた。

「…と、私も」

と言って、着ている軍服を脱いで、EM大尉も海に入った。

HYはコテージにHMとJRを呼びに行った。

TYとIYは、コテージにあるケースからグレネードランチャーを取り出すと、そこに弾頭が赤く塗られた弾を込めて、海岸に走り出す。MPはコテージにある浮き輪をあるだけ手に取ると、海岸に行き、ハンマー投げの要領で海に投げ入れた。

浜辺で、グレネードランチャーのストックを伸ばして、片膝について発射体制をとるIYにIMが、

「IY…それは？」

「海難救助用の弾です。ここからワイヤーのついた救命具が射出されます」

「…そうなんだ」

「T Y先輩、A M先輩を頼みます！私は准尉を」

「分った！頼むよI Y！」

「はい」

H GとA Mはそれぞれ手近にあるM Pが投げ入れた浮き輪を掴むと、海に潜った。W Y、E Y、E M大尉もそれに習った。

H Gは（クソ…潮の流れが速いな…）と思いつつ、沈んでいくA Xの姿を見つけると何とか近づき、A Xの足を掴んだ。そして、浮上を始めた。H Gが周囲を見ると、A MもB Xの足を掴んで浮上している最中だった。

途中で、E M大尉がA Xの腕を掴んでサポートしてくれた。

H G達が海面から顔を出すと、I Yが的確にH Gの前に救命具を着弾させた。（うまいぞ、I Y）と思って、救命具をA Xに掛けると、H Gは手を上げた。海岸では、I Y、I A、H Y、I M、C E、K Y、T T、T K、M S、A Kがワイヤーを引いた。

一方、B Xの方は、T Y、M P、M J、U K、N A、K T、J M、I I夫婦、M Zがワイヤーを引いた。

X姉妹が波打ち際まで来ると、B XをM Pが、A XをI YとI Aが浜に引き上げた。そこに、H MとJ Rがそれぞれついて、救命活動が始める。それを見たI MがI Yに

「I Y、この人達は？」

「准尉の姪のH Mさんとその同僚のJ Rさんです。二人供港町総合病院の看護師の方で、急救命士の資格を持っています」

「…そうなんだ！なんか準備がいいね」

「たまたまですが、あの子達運がいいですよ」

とI Yが言っている最中に、B Xが息を吹き返した。B Xの蘇生処置を終えたJ RはA Xの

蘇生処置を手伝いだした。

H G達が浜辺に上がってくるときには、二人は息を吹き返した。

「…どうだ？ H M」

「おじさん…もう大丈夫ですよ」

「そうか、コテージに運んでくれ」

「はい、M Pさん、お願いね」

「ハイネ」

M PはX姉妹を両脇に抱えると、コテージに運び込んだ。コテージには、S Y達がお湯を沸かしていて、X姉妹達の体を拭いてあげた。

「どうだ？」

と、コテージの扉を開けて入って来た、H Gに

「社長、見ちゃダメですよ」

S Mに行く手を阻まれた。どうやら、水着を脱がされて全裸状態らしい…付き添っている

H M達が

「まだパニック状態だけど、息をしているから大丈夫…だから、外に居て」

「わかった」

H Gがコテージの外に居ると、A Mが

「…准尉、どうでしたか？」

「俺は見えてはいかんらしい…真っ裸の様だ。H Y、中に入って確認してきてくれ」

「了解しました」

と言って、H Y以下女性陣はコテージの中に入っていった。

やがてコテージの中からX姉妹の鳴き声が聞こえてきた。それを聞いたH GとA MとI

Iは「「よかった…」と安堵した。

「准尉、中に入っているですよ」

とH Yがドアを開けて言うと、H G達男性陣は中に入った。そこには、バスタオルを巻いたX姉妹が抱きあって泣いていた。

「おい、子鼠共」

「「はひっー」」

「海はプールや川と違う事が判ったか？」

「「ハイ、パパ、ゴメンナサイ！！」」

と言って、二人はH Gにしがみついた。その時二人のバスタオルが落ちたが、お構いなしだった。

それを見ていたI MはI Yに

「ねえ、I Y」

「なんですか？」

「この子達、H G社長のホントの娘なんじゃないの？」

「…隠し子の噂は絶えないですけど(笑)」

「Yお嬢様、ホントですか？」

とT Kが会話に入ってきた。

「違いますよ…多分」

「何ですか？その間は？」

「確証がない物で(笑)…(本当は、調査済みですけど(舌))」

「エーッ」

「ねえ、I Yこの人誰？あんたの事『Yお嬢様』って言ってるけど」

I MがT Kを見てI Yに訊ねると、

「父上(B侯爵)の第一秘書のT Kさんですよ。私のD国語の家庭教師でもありましたが」

「へえ、そうなんだ…」

「I M様でいらっしやいますね。初めましてYお嬢様のお父上B侯爵様の秘書のT Kと申します。お嬢様と仲良くしていただき、ありがとうございます」

「あ…はい、初めましてI Mです。一応歌手やってます」

「そんな、世界的に有名な歌姫様が…ご謙遜を」

「アハハ…(汗)」

●そこはね…

「…やれやれ、こんな早くに『赤玉(救命用のグレネードランチャーの弾の事)』を使うとは、思わなかった…あれ高いんだぞ!」

とH Gが言うと、X姉妹が

「『パパ、えげつなく』」

と言うが、周りは「『そこはね、『ケチ』とか『守銭奴!』とか『しぶちくん』とか『せこい』『つ言うのよ!』』と言ったので、H Gは「なんだよ!」と言った。

「ま、子鼠共が無事でよかった…ここで何かあったら、ひい婆さんに合わせる顔が無い、それとD A親分にも…」

とH Gが安堵して言うと、I MがI Yに

「ねえ、I Y…H G社長の今の言葉ってどういう意味?」

「はい、准尉のひい御婆様は、あの娘達(X姉妹)のひいひい御婆様を養女に迎え入れたと准尉から聞いています。それに、D A親分はこの浜とコテージの持ち主で、准尉の御親戚です」

「へえ、そうなんだ(…なんか複雑)」

…I YはT Kの手前、わざと言っています。事实は、養女にしている事が判明しています。
作者

H GはE M大尉、W Y、E Y、J Rに向かって、

「ご協力、誠に感謝します。あの子達の親代わりとしてお礼を言います」

と深々と頭を下げると、X姉妹もそれに倣った。

「いえ、良かったですね」

とW Yが言うと、J Rも頷く。

「あなた達、姉妹なのね」

とE M大尉が言うと、X姉妹は

「はい、双子です。ありがとうございます」

と返事をした。そこで安堵したのか、E M大尉は

「よかった…って、あら私、インナーだったわ…お恥ずかしい…」

と言って、コテージの外に駆け出して行った。

それから、A M、M P、T Y、I Y、I A、H Mに

「みんな、ありがとうな」

と言って、頭を下げた。それを聞いてT Kは（…あんなに真剣になって、やはりH G社長の
隠し子ですね…母親は誰ですの！キッ悔しい！）と変な解釈をした。

そこに、S Yが手を叩いて、

「はい、皆さん！X姉妹が無事でしたので、丁度お昼時ですから、皆さんでバーベキューを
しましょう」

と言うと、皆「はい」と返事をした。

H Gはまだ抱き着いているX姉妹に

「お前達、食べられるかね？」

「ハッイ、パッパ、もう大丈夫」

「…やれやれ、げんきんな子鼠共だ」

と言って、X姉妹の頭を撫でて、軍服に着替えたE M大尉の方を向くと、

「E M大尉、ご一緒にどうですか？」

と訊ねた。

「あら、いいんですか？」

「勿論です」

「それでは、ご相伴に預かりましょうか」

と返事をした。

●バーベキュー

浜辺でバーベキューをしている時になって、Y海軍基地から機雷回収の台船と作業員達がやって来た。

「私は、指揮を執りますので、ここで」

と言って、E M大尉はバーベキューの席から外れた。E Yも

「自分は、上官の補佐をします」

と言って、これも席を外した。

バーベキューの席で、T KはX姉妹にこっそりと、H Gの隠し子疑惑に迫ろうと、

「貴女達のお母さんって…どういう方なの？」

と尋ねると、

「ママは、優しくて綺麗な人でした」

とA Xが答えた。

「えっ？『でした』って、どういう事？」

「うん、故郷の内戦でボクらがハイスクールに通って居た頃、爆撃で死にました」

とB Xが言うと、T Kは涙を流し、隠し子疑惑追及どころではなくなり、

「貴女達、私をお母さんと思っていいのよ！」

と言うと、それを見とがめたT Tに

「あ、このオバサン今、酔っ払ってるから、真に受けなくてもいいのよ」

と言って、K Tを強引に連れ出すと、

「冗談でも、そう言う事言わないでください！あの子達の故郷のI国は今大変な事になっていますから…准尉は、この国に居る限りは、あの子達に楽しい思い出と、これから先、生きるために必要な知識と術を教えている最中ですので」

T Tの気迫にT Kはたじろいで、

「わ、わかりました」

と答えた。

浜辺で作業している作業員は、横ではしゃいでいるH Y達を羨まし気に見ていて、その中にI MとC Eの姿を見つけるが、「まさかね…似ている人だろう」と、言ってるのが聞こえた。それを耳にしたH Gは（…成程、まさかこんな近場に人気歌手とアクション女優が、ウチの娘共とアルバイト達に混じって居るとは思わなか…撮影スタッフでもいれば、また空気が変わるんだろうな）と考えた。

やがて機雷が台船に乗ると、S Y達が「余り物で恐縮ですが…」と言って、バーベキュー

の食事を提供した。

磯で釣りをしていたⅠⅠ夫婦が

「社長！入れ食いですよ。それに大物がかかりますね」

と喜んで。釣果を見せた。H Gは

「ここにも、漁業権があるそうだから、食べる分だけにしてくれ」

「はい、社長…それにしても磯が荒れてますね」

「？」

「磯の貝類とか甲殻類を乱暴に引きはがした跡が随所に見られて…フェンスの向こうと対照的です」

と言うと、H Gは（親父さん所の若い衆がフェンスを越える理由はやはりそれか…）と思った。

「社長もやりますか？教えますよ、磯釣りの仕方を」

とⅠⅠが言うがⅠⅠ夫婦の釣果を見て、

「それだけ、あれば皆食べられるだろう…俺はいいよ」

と言った。

機雷を載せた台船が引き上げる時に、E M大尉は

「私は、これで基地に戻りますが、みなさん楽しんでくださいね…バーベキューご馳走様でした。美味しかったですよ」

と言って、台船に乗り込むと、基地に向かって出発した。

それと同時に、W Yの連絡で沖に停泊していた小型巡視艇も引き上げた。

「バイバイ」

とX姉妹が手を振ると、みんなそれに倣った。

●対決！H G v s W Y

「やれやれ…これでやっと、ゆっくり楽しめるな…」

と言って、H Gはコテージのテラスにある安楽椅子に座ってパイプを燻らせた。

そこに、W Yが来て、

「H Gオーナー」

「はい、何ですか？」

「一つお手合わせを…」

と言って、棒と木刀を見せた。

「いいですねあ…」

と言って、木刀を受け取り、W Yと浜に向かった。

「ナニナニ？」

とC Eが言うと、T Yが

「いや、W Yさんにわたしが准尉に得物（棒や木刀）で勝てない話をしたら、手合わせしてみたいと、言ったので…わたしが棒と木刀を持ってきました」

「そうなんだ！」

「W Yさんとは、過去何回も試合で手合わせしていますが、敵わないので…この勝負、わたしも興味があります」

浜辺で対峙した二人。

「お互い防具がありませんから、お手柔らかに…」

とW Yが棒を構えて言うと、

「こちらこそ」

と言つて、H Gも木刀を構えた。

「わたしが審判をしますよ」

とT Yが言つて、

「では、始め！」

皆が見守る中、W Yの棒とH Gの木刀の試合が始まった。

「。パ。パー、ガンバレ〜」

とX姉妹が声を上げた。

両者睨みあつたまま、間合いを取り続けた。

「。パ。パつまんな〜い、さっきから動かない…」

とX姉妹が言くと、M Pが

「そう言う事、言わないネ、二人供互角に近いから攻めあぐねてるヨ」

「凄い試合ね…」

とC Eが言くとI Mが

「わかるの？」

「うん、アクションで剣とかの殺陣のシーンで、間合いを取る時に、相手と合わせないといけないけど、打ち合わせがロクにできていないときに双方どう出るか分からないときは、こんな感じになるわね。わたしの場合は、ここで監督からカットがかかって叱られるけどね」

（苦笑）

先に動いたのは、W Y…打ちかかるW Yの棒を木刀で受け止めるH G。次々と打ち込むW Yの棒をその場で引かずに受け続けた。それを見たT Yは

「あれ？いつもわたしの棒を受ける時は、引くのにな…」

と言つて驚いていた。

「姐さん、あれつて准尉が引く余裕もないんじゃないの？引いてから間合いを詰めて打ち込む隙が見いだせないのかも…逆に近づいて打ち込む隙を伺っているんじゃない？」

とI Aが言うと、T Yは

「なるほどそうかも…I Aあんた、見る目が出来てきた様ね」

「えへへ」

W Yの打ち込みをH Gが全部木刀で受けたので、W Yは手を変えて、棒を繰り出す戦法に変えた。それを見たT Yは

「わたしは、あれが避けられなくて、いつも負けるんだよね」

と言うと、H Gは繰り出す棒をよけて、間合いを詰めて、W Yが繰り出す棒が伸びきったタイミングで、木刀を打ち込んだ。H Gの木刀がW Yの頭の上で止まると、

「参りました！」

とW Yが言った。周囲は拍手喝采…W YとH Gは分かれて一礼をすると、

「いや、W Yさん凄いわ」

と先にH Gが感嘆して言うと、

「いえ、こちらこそ…T Yさんが勝てないと言ったのが判りました」

と言つて、お互い握手した。

「私の繰り出す棒をよく避けられましたね。自信があつたんですが」

「ハハ…短機関銃と同じように、弾幕の範囲が読めれば当たらない様にするのと同じ要領です」

とH Gが謙遜して言うと、W Yは驚き、H Y達は「それって、以前T Yが言ってた言葉！

（「巻き込まれ親父の教育」参照）」と声を上げた。T Yは「それがわかっていても、実践

は難しいけど…（苦笑）」とボソリと言った。

「ハハ、読まれていましたか」

と言って、W Yは苦笑した。そこで、T Yはふと思いつき、

「I A」

「ハイな姐さん」

「W Yさんの棒の繰り出しだけで立ち会って貰って御覧」

「えゝそんな！無茶を」

と言って、遠慮するI Aに無理矢理棒を持たせたT Yは

「すみません、この娘に、棒の繰り出しだけで相手願いますか？」

とW Yに行った。

「…いいけど、棒の繰り出して、寸止めが効かないから危ないわよ」と言うと、

「多分、大丈夫。この娘、避けられるから」

と言って、I AをW Yの方に押しやる。H Gも「I A落ち着いて、棒の先を短機関銃の銃口と思え」と言って、励ます。

「は、はい。お願いします」

と言って、棒を構える。

「じゃ、怪我しない様にこつちも気を遣うけど、当たったらゴメンね」

と言って、W Yも棒を構えた。

H GがT Yに、

「ずいぶん、乱暴な対処療法だな」

と言うと、T Yは

「あの娘、いつもわたしと剣術の稽古する時に、私の棒の打ち込みを避けられるのに身がすくんで動きを止める時があるから…まるで、夜間山道をバイクで走っているとき、道に飛び

出した狸みたいに…」

「ハハ、言えるな。出来る癖に躊躇い癖がある師匠に似たのかもな」

「准尉！それを言わないでください」

「ねえ、誰か審判やってよ」

とI Aが言うと、T Yが

「あつ、ゴメン…では始め！」

I Aは頭の中で（准尉の言葉、准尉の言葉…）と呪文のように繰り返していた。

W Yが棒を繰り出してきた。I Aは引きつつ、それを交わして逃げた。I Aが繰り出す棒を避け続けるので、W Yは（手加減必要ないかな）と思って本気で繰り出してきた。それを

I Aは慌てながら、避けたり棒で受けたりした。W Yが本気になったのを感じてT Yは、

「はい、それまで！」

と言うと、W Yは動きを止め、

「こんなに私の棒の繰り出しを避けた娘初めてだわ！」

と粗い息をしながら言った。一方、I Aは顔面蒼白で

「おわっだゝ（口からナニか出ている感じ（笑））」

と言って、その場にへたり込んだ。

「なんだ、I Aやればできるじゃないか、あれで隙を見つけて打ち込めばいいんだ」

とH Gが言うと、I Aは

「准尉、簡単に言いますが、逃げるのがやっとなんです」

と言いつ返した。

E Yは（あの要領で、短機関銃の弾を避けてたんだ…それに、わたしの投げ技に受け身を取れたのも、咄嗟の判断だったし…やはり恐るべし碇屋）と以前の合同練習と実習時での出来事を思い出していた。

C EはさっきのW YとH Gの試合を見て、アクション女優魂に火が付き、

「わたしも、H G社長に弟子入りしたいな」

と言うと、M Sが

「チョ、やめた方がいいですよ」

「どうして？」

『どうして』って…C Eさん、さっき帰ったK J君の事知ってますよね？」

「はい、I Yが嫌っているストーカー君でしょ？」

「いや、そうじゃなくて(苦笑)…一応、私達の署の捜査官なので…」

「彼がなに？」

「以前、H G社長の所にI Y目的で弟子入り試験受けたら、半殺しにあったんですよ」

「あら、ホント…でもあり得そう…だってH G社長『娘のI Y目的の不埒な奴は成敗してくれる！』的なノリで挑戦を受けそうだから(笑)」

それをI Mと聞いていたI Yは(相変わらず、噂が独り歩きしている…アイツ(K J)を半殺しにしたのは、M Pなんだけど…)と、苦笑いをした。

「あつ、当たってるかも！…じゃなくて、碇屋入門試験は大変なのよ、やめておいた方がいいですよ」

とA Kが真剣に言うのと、C Eは笑って

「そう言う意味で、弟子入りするんじゃないですよ。わたしがエージェントなんて、とても…アクション女優として、もつと演技の幅を広げたくて、より実戦的な剣術や組手の動きを身につけたいから、教わろうと思って、それに銃器の扱い方とかね」

と言うと、M SとA KどころかH Yが安堵の表情をした。

「そう言った事ならいつでもウチに遊びに来てください。C Eさんの演技の幅が広がるのであれば、協力しますよ」

とH Gは言った。

●夜の乱入者

夜：

昼間は、普通に食材を焼いたバーベキューだったが、夜は焼いた麺類や米や水に溶いた小麦粉を使った料理が加わり、炭水化物主体のバーベキュー料理になった。

その後、X姉妹とT TとS Yの子供達は浜辺で花火をして遊んだり、H G達大人はお酒を片手に浜辺に座って焚火の前で歓談をしていた。I Mが歌を歌い出し、それにT Y達が加わり、I YもI Mに強制的に歌わされたりしていた。

そこに外船機のエンジン音がしてきて、浜辺にゴムボートが乗り上げて来たので、H Gは「誰だ！」

と言って、拳銃を構えると、相手は手を挙げて

「あ、撃たないで…私よ」

と言った。

「どなたです？」

と、H Gの隣に居たH YがL E Dライトで照らすとE M大尉が居た。

「来ちゃった！」

と一言言っ舌を出した。

「E M大尉！…どうして？」

と驚くH Gとその周辺に居た人達…E M大尉は、悪びれる事もなく、

「いやあ、昼間楽しそうだったから、強引に仕事終わらせて…ね。それに、K Y先輩と積もる話もしたいから」

と言うと、H Gは

「任務に差し支えなければいいですよ」

と言った。

●エピローグ、肝試し

HYがこの手の話が苦手なので、母屋では怪談話や肝試しはしていないが、X姉妹が

「「今度は、肝試しがしたい」」

と、言い出したので、海水浴から帰って来た人で、翌日まで余裕がある人が母屋三階に集まった。

参加者は、HG、TY、IY、IA、AM、MJ、X姉妹、HM、SY、SM、KT、N
A、JM、WY、IJ、IM、UK、CE、KY、AK、TKの錚々たるメンバー

当然、母屋住人のHYとMPは参加を拒否した。

最初に話す、HGの母屋の霊達の話では、IYの目には、HGの後ろで話の当の本人達が生きりにHGの頭をどついているのが見え、SYとSMの厨房での話では、当の本人達がヒソヒソと話し合っているの、IYは（話を盛っているのかな？）と思った。

IAは、実家の運送会社で実際にあった事故物件の話し。TYはツーリング仲間と見た夜間の山道での話。IJは、夜の磯釣りでの怪談話。

HGがC国の戦地で見た。伝令の幽霊の話や、TKがD国に居た時に聞いた伝染病で死んだ死体が夜な夜な徘徊する話、IYとTKのB侯爵邸の亡霊の話や、HMの港町総合病院での話、AMとMJのA国に居た時代の依頼先の屋敷内での幽霊やポルターガイスト話、AKの水上署での出来事や、検死の時の話（AKは水上署の鑑識課員です）、IM、CE、UK、KYのロケや番組収録のテレビ局の怪談話や開かずのスタジオの話は、皆リアルすぎて、聞いた人はもとより、母屋の霊達もドン引きした。X姉妹の話は、内戦の故郷の話で、聞いている人からは「それは、あなた達が見た戦場での光景ではあるけど、怪談話じゃないのよ」

と注意を受けた。

結果、普通に怪談話したのは、IJだけ：

「巻き込まれ親父の海難 Ⅱ完Ⅱ」